

開講日	2014年春期 水曜日 18:30-20:00	講義場所	研究棟11階講義室A・B
コースディレクター	名古屋市立大学大学院医学研究科 臨床薬学分野 教授 木村 和哲		

科目概要 および 期待される 成果	<p>【概要】近年、疾病の原因を分子レベル、遺伝子レベルまで解明することが可能となり、それをターゲットとした薬物治療も盛んに行われています。抗がん剤ではがん細胞の成長を促す酵素を阻害する分子標的薬や糖の吸収を司るトランスポーターを阻害する糖尿病薬など多種多様です。しかし、薬の効き目がシャープになればなるほど使い方にも細心の注意が必要です。本講座では様々な疾患の最新の治療薬を紹介し、その正しい使い方、注意すべき副作用を体系的に概説いたします。さらに、高齢者は数多くの薬を併用しているの、複数の薬剤を同時に服用したときの相互作用も一部紹介したいと思います。</p> <p>【期待される成果】臨床現場から離れた看護師、医師、薬剤師に、最新の薬物治療を理解して頂くことで、医薬品の適正使用、副作用の早期発見に貢献できると思われます。また、医療費の高騰のなか、薬剤師以外のメディカルスタッフが薬剤の情報を共有することは、不必要な薬の削減にもつながり、医療経済学的にも非常に有益なことと考えています。近い将来、個別化医療が浸透すると、患者それぞれに適したonly oneの薬を使用する時代が来るかもしれません。</p>
目標とする 資格	

サブカテゴリ	No	タイトル(仮)	講義概要	開講日	講師(所属)
L-1 講義室B	1	お薬の飲み合わせの知識	高齢者になるほど服用するお薬の種類も増え、副作用も多く見られます。お薬の飲み合わせについては添付文書に多く記載されていますが、そのメカニズムまで言及されているものはあまりありません。本講義では薬と薬、薬と食品の代表的な飲み合わせ例をわかりやすく概説します。	4月16日	教授 木村 和哲 名古屋市立大学大学院医学研究科 臨床薬理学
L-2 講義室B	2	お薬の効き目と遺伝子多型	お薬の効き目の個人差は、薬物代謝酵素などの遺伝子多型によって予測することができます。本講義では、遺伝子多型を考慮したオーダーメイド薬物療法を立案するうえで重要なポイントについて講義します。	4月23日	准教授 中村 克徳 名古屋市立大学薬学部 臨床薬学教育研究センター
L-3 講義室B	3	お薬の相互作用と副作用	複数の薬剤が記載された処方箋では、薬物相互作用による作用が増減や副作用の増強を考慮する必要があります。本講義では、薬物代謝酵素であるCYPの抑制に起因する相互作用を中心に、薬の相互作用と副作用について解説します。	5月7日	准教授 二口 充 名古屋市立大学大学院医学研究科 分子毒性学
L-4 講義室B	4	PK/PD	体内でのくすりの動きを理論的に考察する方法にコンパートメントモデルがあります。薬物動態学の基礎を学ぶことで投与条件による薬効と毒性を予測し個人の病態に適した薬物療法に生かすことができます。	5月14日	教授 酒々井 眞澄 名古屋市立大学大学院医学研究科 分子毒性学
L-5 講義室B	5	がん疼痛緩和と医療用麻薬の使い方	がん疼痛は患者のQOLを低下させる苦痛な症状ですが、WHOの方式ががん疼痛治療法により効果的に制御できます。がん疼痛緩和の症例を通して、医療用麻薬の特徴や使い方を学び、緩和薬物療法について考えます。	5月21日	特任准教授 川出 義浩 名古屋市立大学大学院薬学研究所 病院薬理学
L-6 講義室B	6	糖尿病の新しいくすり	日本の糖尿病人口は2012年の調査では950万人と推定されており、増加の一途をたどっています。近年、糖尿病に対し様々な治療薬が開発され、今後もその傾向は継続します。本講義では最新の糖尿病治療薬についてわかりやすく説明させていただきます。	5月28日	病院教授 岡山 直司 名古屋市立大学大学院医学研究科 消化器・代謝内科学
L-7 講義室B	7	抗がん剤と分子標的治療薬	がんの増殖を抑制する薬剤には、殺細胞作用を有する抗がん剤だけでなく、分子標的治療薬が近年新たに登場しました。本講義では、これらの代表的薬剤について、適正使用の観点からその特徴等について概説します。	6月4日	病棟薬剤業務主査 近藤 勝弘 名古屋市立大学附属病院 薬剤部
L-8 講義室B	8	くすりと医療経済	医薬品の適正使用推進は医療事故防止のみならず、患者QOLの改善、有害事象減少による入院期間の短縮、治療効果の向上といった効果が得られることが知られている。本講義では医薬品適正使用の具体例を挙げ、医療経済的観点から解説する。	6月11日	教授・薬剤部長 伊藤 善規 岐阜大学医学部附属病院 薬剤部
L-9 講義室B	9	くすりの安全性	最近の新薬は、分子標的薬や抗体医薬など、新しい概念に基づいて開発されているものが多くあります。それに伴って、それらの安全性に関する評価も新しい考えや手法が用いられるようになってきています。そこで、新薬の開発段階や市販後における安全性評価の最近の動向について概説します。	6月18日	教授 頭金 正博 名古屋市立大学大学院薬学研究所 医薬品安全性評価学
L-10 講義室B	10	くすりと健康食品	健康食品に含まれる成分のなかには処方薬の作用に影響を与えるものがあります。また、健康食品が臓器障害の原因になることもあります。有害作用の発現を知ることによって安全な薬物療法に生かすことを学びます。	6月25日	教授 酒々井 眞澄 名古屋市立大学大学院医学研究科 分子毒性学
L-11 講義室B	11	セルフメディケーション	セルフメディケーション推進のため薬事法改正など大きく変化しているわが国の一般医薬品販売の現状と課題を中心に、実際に市販の医薬品やサプリメント等でどこまで対応が可能かについて具体的事例をあげ講義します。	7月2日	教授 鈴木 匡 名古屋市立大学大学院薬学研究所 臨床薬学教育研究センター
L-12 講義室A	12	在宅における認知症高齢者とくすり	認知症高齢者の服薬管理は、認知症の種類、症状、生活環境の理解が重要です。本講義では、認知症の中核症状、行動・心理症状、用いられる薬剤について説明をし、在宅における服薬の工夫について、事例を用いて解説します。	7月9日	講師 淵田 英津子 名古屋市立大学看護学部 高齢者看護学
L-13 講義室A	13	睡眠とくすり	睡眠薬は高齢化に伴い処方率も重要性も高まっているが、長期服用後の休薬が難しく、安易な処方に対する批判も強い。この問題点を踏まえて作られた、最新の不眠症治療ガイドラインと新規睡眠薬を紹介いたします。	7月16日	教授 桑 和彦 名古屋市立大学薬学部 神経薬理学
L-14 講義室B	14	高齢者とくすり	歳をとると身体機能の低下に伴い、薬が効き過ぎたり、副作用が強くなることがあります。薬を安全に、効果的に使うために、高齢者の身体に起こる変化を加齢によるホルモンの変化などとともに説明致します。	7月23日	助教 片岡 智哉 名古屋市立大学大学院薬学研究所 病院薬理学
L-15 講義室B	15	漢方薬	現代医療における漢方薬を使用する意義、使用する際の注意点を概説します。現代医療における漢方薬を使用する意義、使用する際の注意点を概説します。	7月30日	教授 牧野 利明 名古屋市立大学大学院薬学研究所 生薬学